

氏 名	志 村 岳 彦
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	甲 第 177 号
学位授与年月日	2014年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	日本の笑いの文化 ―道化を中心に― (Laughter in Japanese Culture: The Notion of <i>Dōke</i>)
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 ツベタナ I. クリステワ 副 査 名誉教授 青 井 明 副 査 教 授 リチャード L. ウィルソン 副 査 上級准教授 佐 野 好 則

論文内容の要旨

本論文は、山口昌男が1970年代に提出した「道化論」を、歴史的・社会的・文化的視点から解釈し、その意味と貢献を評価したうえ、現代の「笑い」の文化の特質を分析することによって、「道化論」の限界点を追究し、その考え直しを試みたものである。

「道化」の本質は、「笑い」を創出し、観客を徹底的に楽しませる一方、あらゆる問題について考えさせることにある。だから、その具体的な形式や技法などは、文化によって、時代によって異なる。山口の「道化論」の大きな特徴は、社会風刺を強調したことにある。その理由の一つは、山口本人があらゆる場で宣伝していたように、1970年代の閉塞した知的状況を牽引するという狙いがあったからだ。一方、もう一つの理由は、山口の道化論が西洋の理論を大いに取り入れ、その理論が社会的役割を中心とする西洋の「笑い」の文化に基づいているからだと考えられる。

山口の「道化論」が提唱された当時は、その社会的・文化的・理論的インパクトがきわめて大きかったが、現在の「笑い」の研究状態をみると、およそ40年前に熱狂的に歓迎された「道化」という概念は、今や忘れ去られてしまったのではないかと結論づけられる。こうした傾向は「笑い」の文化の現状とも呼応しているといえる。その文化はとても盛んになった一方、文化創造を促すような哄笑が形成されにくくなり、社会風刺が薄くなってきた。それゆえ、山口の「道化論」を活かすことは、日本における「笑い」の文化史をたどり、現代の「笑い」の研究のみならず、「笑い」の文化そのものにも影響を及ぼすことになるだろう。しかし、考え方や笑い方から思想や理論までがすでに異なっているので、「道化論」を活かすためには、それを「異化する」、すなわち再考察する必要がある。

山口昌男が提出した道化論は、あらゆる芸術創造の場に衝撃を与えたが、しかし一方、日本文化のなかの道化に関しての分析は十全ではない。よって、本論文の目的は、日本の道化を考察の対象にし、「笑い」の文化の比較研究の基礎を考慮したうえ、「続・道化論」を試みることにある。

第一章では、西洋における道化の系譜をたどり、トリックスター論やフール論といった先行研究を出発点としながら、シェイクスピアからラブレーまで、イギリス・フランス・ドイツなど、西洋文学の代表作の具体的な分析を行っている。「権力」対「道化」という西洋文化における道化の主要な役割に着目する一方、こうした伝統に基づいた道化論を異文化に応用する是非について考察し、その限界点について吟味している。

第二章では、日本における道化の文化史を扱い、スサノオとアメノウズメの神話から井上ひさしの作品まで、古代から現代に至るまでに登場したはみ出し者について紹介している。考察の大きなメリットは、従来の研究において考慮されてきた、狂言の太郎冠者や歌舞伎の「猿若」のような、特定の「道化訳」にとどまらず、平中・『源氏物語』の末摘花と源典侍・「虫めづる姫君」など、「道化的働き」をしている多数の登場人物をも取り上げ、作品におけるその役割を追究したことである。

第三章では、狂言の太郎冠者の振る舞いに着目し、彼が巻き起こす「クスクス笑い」について詳しく分析している。さらに、現代までの狂言の歩みをたどり、高橋康也の『まちがいの狂言』、京極夏彦の『豆腐小僧』、梅原猛の『王様と恐竜』という新作狂言を分析し比較したうえ、芸能における伝統と創造の問題について考察している。

第四章では、現代日本文化の道化について、特に「ものまね」に焦点を当てて論じている。「もどき」や「もじり」など、模倣の伝統を踏まえて、「細かすぎて伝わらないモノマネ」という現代の「ものまね」の特徴について考察し、笑いの「おたく化」という現象を取り上げている。結びには、「想像」から「想像」へ、という「ものまね」の働きについて吟味している。

第五章では、まずは「笑い」の文化の現状に鋭い目を向け、本来「権力」や「オーソリティ」との対立として成立するはずの道化は、ビートタケシなどのように、「オーソリティ」と置き換えられていることを批判している。「薬/毒」としての「笑い」の働きや効果について分析し、山口昌男の「道化論」の大きな役割を再確認したうえ、現代の「笑い」の文化に適合する「続・道化論」の必要性を根拠づけている。日本文化における「笑い」の生成過程やメカニズムを考慮し、「雅俗と俗雅」、「痴と知」をキーワードにそのモデルづくりを試みている。さらに、和歌の「よみ(詠み/読み)人」や能のカタルシスなどを参考にしながら、「想像」と「創造」にいざなうという観客参加論を考察している。締めくくりには、現在の日本の知的状況にもふれ、道化的思考の可能性について追究している。

日本の道化の大きな特徴の一つは、作品を観る者・巻き込まれる者が「はっこりする」という点であり、これが西洋の道化の刺激的な猥雑さと混ざり合って、ユニークな性格を作り出している。その代表的な例は、太郎冠者の「クスクス笑い」であるが、こうした笑いは、日本文化における「道化役」だけでなく、パロディを考える際にも有効な視座とな

りうる。一方、パロディが、数多くのリメイクを生み出してきた現代文化の主要な特徴の一つであることを考慮すると、「続・道化論」の研究は、「笑い」の文化に限られず、現代文化のあらゆる現象や作品の分析にも応用できると考えられる。

論文審査結果の要旨

2014年1月21日、クリステワ・ツベタナ、青井明、リチャード・ウィルソン、佐野好則の各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭に志村氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

2013年1月15日に行われた中間発表審査では、志村岳彦氏の論文改善のために次の三つの課題が挙げられた。すなわち、各章との間の関連性を強めることで議論の流れをいっそう明確にすること、日本文化における「笑い」や「道化」の歴史をもっと詳しく取り上げることで考察を充実させること、研究の大きなメリットと見なされる現代文化における「ものまね」の考察や観客参加論の分析をいっそう強調すること、という三つである。最終的に提出された博士論文にはこれらの点が改善されていた。特に、日本文化における「笑い」の歴史の考察がもっと細かくなったので、比較文化的アプローチも成立してきたし、「道化論」の考え直しの必要性も明瞭に根拠づけられてきたといえる。さらに、志村氏が現代文化における「笑い」の分析をいっそう充実させたうえ、研究者の社会的責任を示したことは、高い評価に値するものである。

青井明教授は、論文のスタイルがよいことと誤字・脱字がきわめて少ないことを指摘したうえ、山口昌男の道化論の再評価ができた、と評価した。さらに、道化の定義や地域性を論じるのは難しいが、よく纏められているという意見を表した。一方、次のような質問とアドバイスもした。すなわち、fool に対して joker はどこか異質な感じがする；分析のなかで「アジアの道化」という言葉を使っているが、どの地域を考えているのかについての説明もなし、考察もない；現代文化の道化の考察のなかで獅子文六のユーモア小説をも参照するとよい；落語をも取り上げ、登場人物に注目すべきだった、ということである。志村氏は、コメントをありがたく受け止め、できる範囲で反映してみると言った。特に、落語を取り入れなかったという大きなミスについて反省したうえ、論文のなかでこの問題について少なくともお断りする必要があると認めた。

リチャード・ウィルソン教授は、山口昌男がちょうど一年前に亡くなったことを考えると、この研究がとても意義深いものであると指摘し、中間報告に比べるとだいぶよかったことを認めた。特に、中間報告では、焦点が「笑い」にあるか「道化」にあるか、はつきりしていなかったことに比べると、今回は「道化」が間違いなく考察の中心になってきたこと、また、第二章における日本の道化についての記述が増えたことを評価した。さらに、志村氏が論文では理想をもって物を見ていることは、非常に尊敬すべき態度であるという意見を表した。つまり、**description** に留まらず、**prescription** にも励んだという意見である。一方、西洋の場合は認識論・心理学のアプローチを道化研究に取り入れることが多いので、こうしたアプローチをも考慮すべきだった、また、比較研究は、「日本」対「東洋」という枠組みを超えて、他の文化、少なくとも「アジア文化」をもっと広く取り上げるべ

きであるというコメントをしたので、志村氏はコメントの重要性を認め、今後の課題にすると反応した。

佐野好則上級准教授は、「人文科学の面白さを示したい」という志村氏の執筆動機がよく、その心がけを十二分に発揮できたと指摘した。ウィルソン教授と同様に、論文には **description** のみならず **prescription** もあること、また、この研究をライフワークにする覚悟を持っていることを評価した。停滞している社会とは何かをおさえることが大事である、と論文の社会的・文化的意味にも着目した。

ツベタナ・クリステワ教授は、論文が改善されたという他の審査員による評価を支持し、さらに、観客参加論考察において和歌の「よみ人」に遡る「受容者の参加」という日本の伝統的な文化の特徴を取り上げたことを高く評価した。一方、いまだ不十分である点を指摘して、できるだけ改善してみることを進めた。なかでも、最も重要に思われるのは、「笑い」の文化の比較的分析をそれぞれの文化や時代の価値観と関連づけることである。ラブレーやシェイクスピアなどの作品に見るように、西洋文化において「道化」が普及したのはルネサンス時代であり、王などの権力者には不完全であることについて教える役を果たしていた。それに対して、前近代の日本文化においては、完璧なヒーローが一人もなく、中間領域が重んじられてきたので、社会の土台を揺るがすような哄笑ではなく、「クスクス笑い」が形成した。また、太宰治や井上ひさしなどについても具体的なコメントをして、さらに、注釈の付け方を統一させ、注釈のなかで本論において取り上げなかったこと、異なる解釈がありうることなどについて示すことによって、議論を多層化し、さらなる深みをめざす、ということを進めた。

以上、様々な問題点や改善ポイントが挙げられたが、審査委員会は志村岳彦氏の研究が博士論文として高いレベルのものに達しており、「道化」の研究に大きく貢献するものであるという結論に達した。

審査委員会は、2014年1月21日13時15分から15時15分まで、国際基督教大学教育研究棟257号室で最終口述試問を実施し、それが一般公開となっていたので、他の大学院生も出席した。引き続き審査委員が最終判定を行った。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が博士の学位を授与するに値するものと認めた。